



史料館だより
第12号
1988・11・5

編集・望月 浩
発行・神戸市立東灘区立文化史料館

〒658 神戸市東灘区本町3-5-7
電話(078)453-4980

普星市教育委員会 森岡秀人

摂津の考古学からみた東灘四

東灘区周辺の縄文遺跡で最も数多いのは晚期に属する遺跡である。縄文時代最末期に位置づけられる、晚期の時期は、一般的に集落自体の沖積平野進出が図られており、西摂地域も大半の晚期遺跡が標高の低い所から発見されている。東灘区では、本山町、北青木・本庄町などの遺跡があり、いずれも同一地域で弥生時代前期の遺跡も形成されている。隣接する芦屋市域でも寺道跡や芦屋寺遺跡が山麓線以南に営まれており、前者はやはり弥生前期の遺跡と関連するようである。ごく最近の小調査でついに蓮賀川式土器を含む土壤などの遺構が見出された。

狩猟採集の縄文時代から水稲農耕の弥生時代へとその推移を巧みに説明するのは社会科の教科書であるが、考古学の研究が進みすぎて、そう簡単にいかなくなつた時、身のまわりの遺跡でそのあたりの複雑さを探つてみるとおもしろいと思う。

今号では、考古学界の最新の情勢なども混えつつ、稻作農耕の始まりについて若干の思考をめぐらそ

うと思つ。

東灘区周辺の縄文遺跡で最も数多いのは晚期に属する遺跡である。縄文時代最末期に位置づけられる、晚期の時期は、一般的に集落自体の沖積平野進出が図られており、西摂地域も大半の晚期遺跡が標高の低い所から発見されている。東灘区では、本山町、北青木・本庄町などの遺跡があり、いずれも同一地域で弥生時代前期の遺跡も形成されている。隣接する芦屋市域でも寺道跡や芦屋寺遺跡が山麓線以南に営まれており、前者はやはり弥生前期の遺跡と関連するようである。ごく最近の小調査でついに蓮賀川式土器を含む土壤などの遺構が見出された。

狩猟採集の縄文時代から水稲農耕の弥生時代へとその推移を巧みに説明するのは社会科の教科書であるが、考古学の研究が進みすぎて、そう簡単にいかなくなつた時、身のまわりの遺跡でそのあたりの複雑さを探つてみるとおもしろいと思う。

今号では、考古学界の最新の情勢なども混えつつ、稻作農耕の始まりについて若干の思考をめぐらそ

うと思つ。

東灘区周辺の縄文遺跡で最も数多いのは晚期に属する遺跡である。縄文時代最末期に位置づけられる、晚期の時期は、一般的に集落自体の沖積平野進出が図られており、西摂地域も大半の晚期遺跡が標高の低い所から発見されている。東灘区では、本山町、北青木・本庄町などの遺跡があり、いずれも同一地域で弥生時代前期の遺跡も形成されている。隣接する芦屋市域でも寺道跡や芦屋寺遺跡が山麓線以南に営まれており、前者はやはり弥生前期の遺跡と関連するようである。ごく最近の小調査でついに蓮賀川式土器を含む土壤などの遺構が見出された。

狩猟採集の縄文時代から水稲農耕の弥生時代へとその推移を巧みに説明するのは社会科の教科書であるが、考古学の研究が進みすぎて、そう簡単にいかなくなつた時、身のまわりの遺跡でそのあたりの複雑さを探つてみるとおもしろいと思う。

今号では、考古学界の最新の情勢なども混えつつ、稻作農耕の始まりについて若干の思考をめぐらそ



図1　牟礼遺跡出土縄文晚期井堰の現地説明風景
(1985年筆者撮影)

くはないであろう。
読者の諸質はいかがかな。

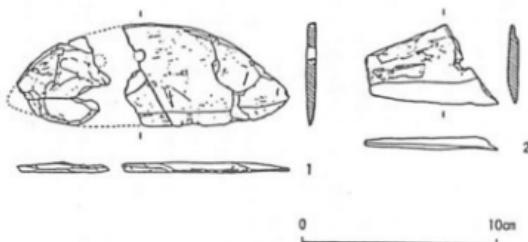


図2 口酒井遺跡第8次調査出土磨製石包丁(浅岡 1988から)

西日本全体が農耕社会に入っている蓋然性が高まっている昨今であるが、私は依然として、突帯文土器は縄文人・縄文社会の作り使った器であるから、その時代は稻作を既に始めていたようと縄文時代と呼ぶのがふさわしいと考えている。生産経済移行の段階から弥生先I期(=弥生早期)と呼んで弥生時代と規定づける佐原真氏の定義に百歩譲ったがうとしても、突帯文土器を弥生土器と名称換えてしまいうような議論だけは断固許せないと思つてゐる。弥生時代に縄文土器が残ると考えても、けつして悪

本庄町遺跡の弥生前期水田址をめぐって

さて、東灘区において一九八四年、京都の平安博物館が発掘を行つた本庄町遺跡では、この近辺で最古の生産遺構である弥生時代前期の水田址がみつかつてゐる。六甲山地前面の標高四百メートルを測る沖積低地で、国道二号線より南に調査地点は位置している。

海浜からは約一畝の臨海潮であり、芦屋川や住吉川など大阪湾へと注ぐ河川の本流からは少し距離をおいている。こんな市街地の深部に兵庫県では最も古く考へていい水田遺構が眠つていただから、その報に接した時はただならぬ驚きを禁じ得なかつた。

確認された水田は、VIa層の上面に広がり、長方形の限られた発掘区の中に一四枚の田面を数えることができる(図3)。刊行された報告書によると、田積には四平方㍍から四二平方㍍までのバリエーションがみられるが、二〇平方㍍代の大きさのものが目立つようである。田面を走る畦畔は幅二〇~四〇㌢、高さ一〇㌢前後を測り、断面形は台形ないしカマボコ形となつてゐる。

水田全体の区画は傾斜する自然地形に即した小さな区画で、考古学では通常「小区画水田」と呼んでいる部類のものである。区画を成す畦畔の連結はそれ直交せず、互い違いとなつており、三叉状に交わる部分もみられる。

水口は水田11と水田12の間に一か所だけ認められるが、各田面への用水の供給は、畦畔をオーバーフローさせるいわゆる畦越し灌漑の方法が採られたよ



図3 本庄町遺跡の弥生前期水田址(古代学協会 1985から)

水田の耕土は、一〇～一五センチの厚さの灰黒色土から成り、耕土面には足跡が明瞭に検出されている。

遺跡における古代人の足跡は、近畿地方では水田調査が活発化し始めた一九七〇年代後半頃より各地で確認例が増してきたが、精密に調査された最初の例は、大阪府の瓜生堂遺跡あたりであろうか。もちろん、それ以前にも古墳の主体部の粘土面に残るヒトの足跡などに気づかれた考古学者もあるが、足跡の形状や法量に大きな関心が呼び起されたのは、やはり水田造構の発掘を契機にしたとみてよい。実際、粘土やシルト質土層から形成される水田面につけられた足跡は、洪水砂や火山灰などにより一気に埋没

すると、非常に検証しやすい状態になるのである。

私の勤務する芦屋市で初めて埋没水田が検出された時も、最初は砂層で覆われた粘土面に残る無数の微妙な起伏と結果的にはカラスキの耕作跡と解された浅い条痕に注意を十分払つたからこそ気がついたという状況であった。発掘を二～三年やり始めた程度の者でも、粘土の凹みに陥入した砂の存在はきわめて判りやすく、スパーンやヘラでコツコツ掘る忍耐と時間さえ許されば、一応は掘りこなせる遺構であるが、糸口を見出すにはそれなりの経験と觀察眼がやはり必要であり、私ども芦屋の調査チームは昨年実施された久保遺跡の中世水田址の発掘でようやく体得できた技術といえる。

少し横道にそれてしまつたが、本庄町遺跡の足跡

は歩行状況までよく読み取れる点が貴重である。水田4・5・7・8・9にあっては、畦を越えて連続歩行する様子が把握されており、畔耕農労働の完結単位になり得ていないことが知られる(図4)。

水田は北東から南西方向に向かって低くなる傾斜地に地形をよく克服して開かれたものであり、排水的機能を果していたと推測される溝4、それから水田11へ引水する溝5、北から南西方向に流れ、溝4と南に分流する溝6、北東から南西へ流れる溝7などがそれぞれ給排水を考え上で重要な役割を担っている。また、溝6・7の存在する発掘区の南東部には堤状の高まりも存在している。

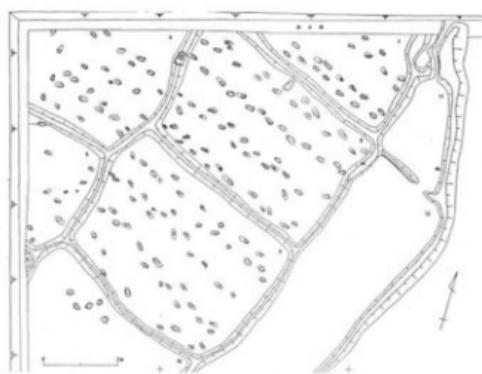


図4 本庄町遺跡水田面にみられるヒトの足跡
(古代学協会 1985から)

土遺物の時期は、層序をよく反映しており、上からIIb層は一四世紀代、IIIa層は一三世紀代、IVa・IVb層は六世紀後半～七世紀前半と順次古くなつて

いる。問題の水田面の広がるVIa層からは、発掘区分東隅の限定された区域ながら弥生前期の土器片一〇点と織文土器片一点が検出されている(図5)。他に不純な遺物がみられないため、消極的ではあるものの弥生時代前期後半と推定されたようである。

この水田址を眼下でも最古の部類に位置づけ、それなりの評価を与えるには、同時期水田の類例研究がぜひとも必要であり、私も多少試みている。以下は、いま少し眼を広げて近畿地方というレベルでの段階の水稻農耕址の実態を垣間見てみよう。

この水田の時期はどうにして考えられたのであるか。それはやはり土器が鍵を握っていた。出

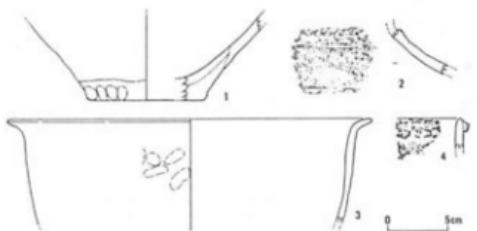


図5 本庄町遺跡のVIa水田層出土の土器(一部)
(古代学協会 1985から)

大阪湾沿岸に集中する初期水田址

近畿圏で弥生時代前期にまで遡る初源段階の水田址は、けつして多くはない。

しかも、その分布は現状のところ、河内潟の南岸に広がる低平地に集中しており、そのすべてが長瀬川と玉串川間の最も低所に偏って存在する。潟岸に近い北側から順次あげると、大阪府東大阪市の若江北遺跡、山賀遺跡、友井東遺跡、八尾市の大園遺跡の四例で、いずれも近畿

自動車道天理・吹田線の建設事業に伴って発掘され

た河内平野屈指の大遺跡である(図6)。

これらの遺跡で見出された弥生前期水田址に共通してみられる特徴は、北部九州の板付遺跡のようなタイプのものが全く認められないことである。つまり、幹線人工水路による大規模な灌漑を積極的に実修し、杭や矢板で補強策を施した常設畦畔を用いて五〇〇平方メートルを越えるような大型水田を営む農業形

面が二三枚以上想定され、一枚の田植は五〇〇一四〇平方メートル程度を測る。水口や排水口は畦につくられおらず、自然地形を利用した排水の状況が推測でき、本庄町遺跡とよく似たあり方を示している。友井東遺跡では南北約一〇〇メートルの範囲で四か所とも不定形な平面プランを示し、畦畔は一方が開放されたものが多く、区画として閉塞していない。水田一枚としての想定面積は一三一八平方メートルで、大きいものではなく、田面には高低差が著しくみられる。南は自然河川により画されている。

小河川により田面が限られる様相は大園遺跡や山賀遺跡でも認められ、自然の小流路とは切り離せない立地条件がうかがい知れよう。

本庄町遺跡で検出されている溝構の中にはこういった自然の流路も含まれていた可能性があるだろう。その一方、比較的大きな川の近くは避けられる傾向が全体にみられる。

ところで、兵庫県下では昨年の秋、紛れもなく弥生前期に比定できる良好な水田址が同じ神戸市の須磨区で発見されている。戎町遺跡と呼ばれる弥生遺跡であるが、ここでは現地表下二メートルの所に水田面が存在し、三一八平方メートル程度の驚くほど極小區画の水田がかなりの規則性を有して連なっていた。畦畔については、南北方向に明確である一方、東西の方向には不明瞭といった特徴も認められている。それはひそかに導水のシステムを暗示する。

図6 近畿地方の初期水田遺跡の分布
 1. 戻町(兵庫) 2. 本庄町(兵庫) 3. 若江北(大阪)
 4. 山賀(大阪) 5. 友井東(大阪) 6. 大園(大阪)



態は考え難く、その經營のあり方に差違を感じとれるのである。

水田区画の比較的把握しやすい山賀遺跡では、田

つて水田自体が明らかに切削されていることで、弥生前期前半にたって遡る余地があるからである。類似した小規模規格志向型の水田は、岡山県津島江道遺跡(突帯文土器期)や高知県田村遺跡(弥生前期)でも確認されており、かような小区画水田が導入期の水稻耕作からとり入れられていたことは、もやは事實として認めねばならないようである。

本庄町遺跡も他の初期水田址との属性比較から弥生前期の蓋然性はすこぶる高く、私は報告者の位置づけ通りこの時期のものとみて不自然な点はないと考えている。したがって、同じ東灘区のより浜海部に位置する弥生前期前半から先行して営まれた北青木遺跡は注目すべき存在といえ、深江。という地名の由来を正しく伝える旧海岸線の入り江は、西から瀬戸内沿いに伝播してきた初期農耕文化の大坂湾における一つの定着地として重要な土地であったと想像される。

本庄町遺跡の初期水田址はそれを端的に物語るものとしても、評価されてよいし、私たちは温潤地で経営が開始されたとされる排水主体制の導入期水田の粗放なイメージからもうそろそろ抜け出さなければならぬ。

晚期縄文人は果たして稲作をしたのか

今号のしめくくりとして、最後に近畿地方の晚期縄文人が水稻耕作を始めていたか否かを、水田遺跡の様相をもとに若干考えてみたい。

先に記した大阪府下の弥生前期水田址のみられた四遺跡には、土器種相においていま一つ重大な共通項が存在している。それは言うまでもなく、縄文晩



縄文土器

期終末の長原式土器を伴出しない点である。長瀬川以南に分布する久宝寺・佐堂・城山・長原などの諸遺跡や玉串川以東の生駒西麓に立地する鬼虎川・鬼塚両遺跡が長原式を中心とする突帯文土器主体の集落であることを思えば、それにはさみこまれた低湿部の弥生前期水田地帯がすこぶる先進性を帯びてみえてくる。前期の四遺跡はそのすべてが第I様式後半から営まれ始めたものであり、現状では弥生前期後半に始期をもつ相当結束力の強い本格的な農耕集団において、初めてまとまりある生産域の展開が促されたものと解される。

わが本庄町遺跡についても同様な解釈を与えるとひそかに考へているが、その指い手が周辺縄文人たる急激な同化・変革によるものなのか、瀬戸内ルートによって猛スピードで東進してきた外来者集團によるものなのか、今の私にはわから決し難い。いずれにせよ、少なくとも近畿地方にあっては、大地と不可分な水田址自体が興文時代の遺跡から見出されていない以上、柳原土器や石包丁の存在を直ちに食糧生産の開始と結びつけた昨今の学界の闘争には賛同できないのである。(つづく)

【スタッフから一言】

★神戸市立中央図書館・2F郷土資料室の机の数が少ない。もっと増やして下さらないと、郷土資料が閲覧出来ません。御一考のほどを。(Y・M)

★今度、新しく入った事務局員の中島薫です。元気いっぱい頑張りますのでよろしくお願いします。(K・N)

★暑い時は何もする気が起らずひたすら寝ておりました。暑さが通り過ぎ、「さあ」と思いきや気候がよくなるとまたまた睡眠が…。人間に睡眠という欲求がなければ私は今頃大学者になっていたのでは

…(H・M)

★学生の頃と違つて、毎日いそがしい日を過いでいますが、どうも生活サイクルが乱れて困っています。元の生活にもどりたい。(T・N)

★2Fで新しく深江北町遺跡を中心とした考古の企画展を実施中です。ぜひ一度ごらん下さい。(M・K)

★今回、一階展示室に戦争資料コーナーを開設しました。戦後43年、戦争を知らない子供だけではなくその子供達も大人の仲間入りをする今、忘れ去られようとしている戦争の悲惨さを展示されている資料を通して今一度考え方をしてみませんか。(T・M)

神戸薬科大学構内古墳(2)

史料館研究員 藤川祐作

本誌(1)号で筆者は「神戸女子薬科大学構内古墳」(以下「前報告」と略)として、その地形実測図の紹介と出土遺物の一部について報告を行なつたが、

その中で、鉄器の実測図が提供されたことと、須恵器の実測図が一部不足していることから、補足報告を約束していたので報告する。

まず、神戸大学考古学研究会へ、石室の実測の提供をお願いしていたが、よい返事をいただけなかつた。この件については、前報告でもしるしたように、あらためて一日も早い報告書発刊を切望したい。

さて、須恵器の実測図(原図)も含め、一括して資料が芦屋市教育委員会に保管されている可能性が強いので、担当者の岩本昌三・森岡秀人両氏に確認をお願いしていたところ、過日その一括保管が確認され、又、當時岩本氏の手によって撮影された遺物写真も含めて提供を受けることができた。

以下、これらの資料を材料として、主として遺物について報告していきたいと思う。

まず、前報告の若干の訂正から。収載した13点の出土遺物の内、1~10の実測者は尼崎貞美子女史、12は鈴木富登氏、鉛筆トレースは尼崎貞美子女史の手によるものであった。そのトレースの複写計3枚のうち筆者の手元にあった2枚を再トレースしたもの

を報告した。残る11~13は、一九八三年神戸大学考

古學研究会発刊の六甲祭パンフレット所取の「神戸女子薬科大学構内古墳調査概要」から、やはり再トーレースしたものである。

今回提供された資料から、あらためて尼崎女史と村川行弘氏の手にかかる、出土遺物の観察表と照合したところ、前報告分13の他に須恵器では环身片2点・高环环部片1点・平瓶1点・塵片3点の断面図と拓本が確認された。以上の7点の須恵器は、原図からトーレースした。

次に、鉄器の実測図は神戸大学考古学研究会が本墳の測量調査を実施したり、森岡・松田和義両氏に依頼して実測されたもので、松田氏よりトーレースの複写が提供されたものを再トーレースした。

なお、芦屋市教育委員会保管資料の中にも、前報告の环類および高环环部・青銅鏡・铁器各1点ずつの実測原図がある。又、実測図などはないが、観察表には須恵器の环身片1点・提瓶(?)片1点・土師器片の器種不明の1点が報告されている。

今回あらたに実測図の提供された遺物を、観察表を元に紹介する。

最後にいつもながら本小稿を書くにあたっては、次の諸氏の協力があった。記して深謝にかえる。芦屋市教育委員会・岩本昌三・森岡秀人・松田和義各氏、古川久雄学友には全般にわたつて協力があつた。

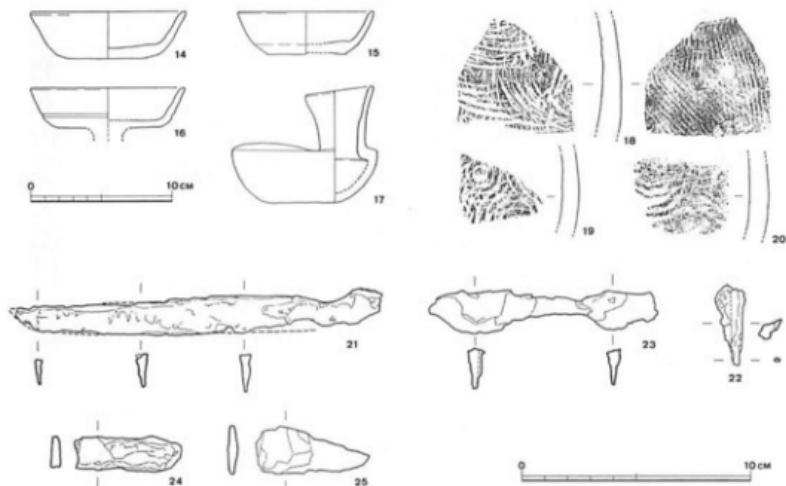
なお、前報告でものべたように、将来、遺物が一括して史料館に寄託されることがあれば、あらためて須恵器の生産地などについて論究してみたい。

須恵器(第1図、14~20)
14~15は环身で、14は丸味のある口縁部。15は薄手の口縁部。
16は高环环部で、薄手の口縁部。一条の沈線あり。

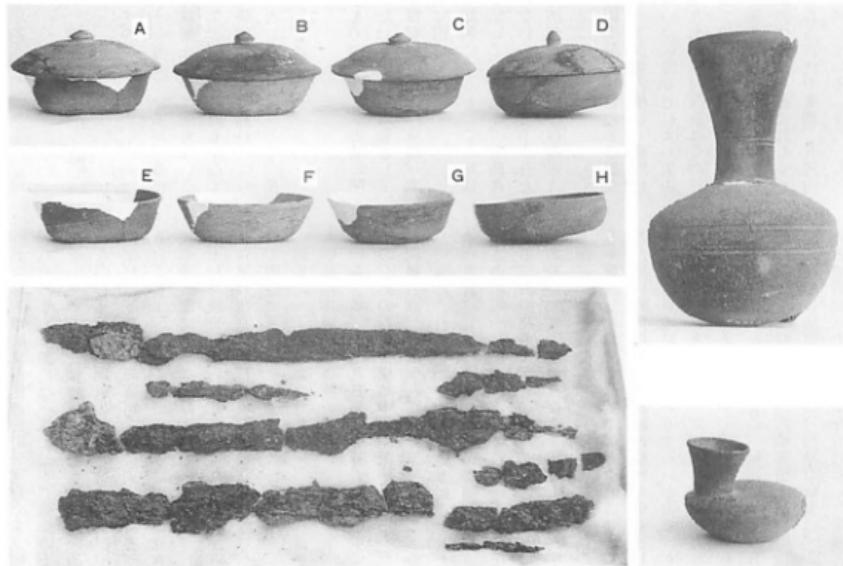
17は平瓶で、高さ八三七・胴径一〇・一七・口縁径五・〇七を計り、口縁部と胴部の継目には手ひねりの痕跡を残す。焼成良。

18~20は塵部片で、18は外面に叩目、内面青海波、外波、焼成良。19は内面青海波。20は内面青海波、外内面共に磨耗激しい。

鉄器(第1図、21~25・第2図)
21は刀子。25はヤリガンナ(?)。他不明。



第1図 出土遺物実測図 (14~20須恵器 21~25鉄器)



第2図 出土遺物写真 (須恵器・鉄器)

東灘考古学文献目録稿(一)

史料館調査員

柏原正民

はじめに

日本中至るところで開発が行なわれている今日、それに伴う発掘調査の数も爆発的な勢いで増え続けている。例えば神戸市の場合を見てみると、少し古例ではあるが一九八三年の一年間に行なわれた発掘調査は五件で、この他の小規模な試掘調査や立ち会い調査も含めるとさるに膨大な数にのぼるものと考えられる。このような状況は東灘区でも例外ではなく、区内のあちこちで調査が行なわれ、多くの新たな事実が判明するなど貴重な成果をおさめてい

見、研究史風に書き進めようと考えているが、なにぶん、筆者が浅学で、また収集を始めて間もないことから貴重な文献の見落しなど、至らぬ点も少なくないかと思う。そのような事項は追って補い、より完璧な物に近づけるよう努力したいと思うので、多くの方々の御教示をお願いしたい。

一、明治から大正

さて今回は明治から大正までの時期を、古墳に関する事項を中心に取り扱いたいと思う。対象としている神戸市東灘区は旧武庫郡御影、住吉、魚崎、本山、本庄の五ヶ町村の地域に相当する。

江戸時代に出版された地誌類によると、この地域に數基の古墳があることを記している(1)。当然考古学的見地による記述ではないので内容も不十分だが、伊賀塚古墳など早くに消滅した古墳の存在をうかがい知ることが出来る(2)。

東灘区内の古墳の中では影塚町2丁目にある处女塚古墳とその東西に位置する求女塚古墳は、菟原處女と二人の壯士による妻問い合わせの伝説などによって古

くから有名であった。一八九七年奥村探古はこの三つの古墳を前方後円墳として位置付け、その当時の現状や出土遺物の情況等を報告した(3)。さらに吉井良秀はこの三古墳を伝説の主人公の墓ではなく、この地に存在したと考えられる古代の豪族、凡河内氏の墓に比定する考え方を発表している(4)。

戸市の東灘区周辺で行なわれた発掘調査のデータ収集を思いつか、その作業を開始している。これによつて集まりつある東灘区に関する考古学の成果や業績を整理し、また紹介していく意味合いを兼ねて東灘区考古学文献目録稿を発表していかたいと思う。單に目録を掲げるのではなく、東灘区内の考古学発

处女塚古墳の東、住吉宮町一丁目の求女塚古墳は一八七〇年(一説には一八七七年)墳丘の土取り作業をしていた際に銅鏡や碧玉製車輪石が出土した。

一九〇〇年頃にも銅鏡二面が発見されたが、一九〇四年には阪神電車の線路工事によって前方部が破壊されてしまった。この時の様子は現場に立ち会った福原潜次郎によって記録されている(5)。ちなみに出土した鏡や車輪石などは、一九一二年住吉町役場から東京帝室博物館(現東京国立博物館)へ寄贈され現在に至る。

置付けられる。

岡本の山手、岡本梅林のあった山添いの一帯（岡本六丁目付近）には多くの群集墳が存在したようだが、明治初年頃よりこの地域が住宅地として開発されるに至り多くの古墳が消滅した。その工事中に発見された石棺、埴輪片や須恵器そして周辺に跡生する土器が散布していることなどが報告されているが、今ではその面影すらうかがうことは出来ない。（11）

（12）

（つづく）

（註）

（1）今回参照した地誌類は次の通り。

a、岡田侯志「摂津名所圖」一七〇一年

b、並河誠所「摂津志」一七三四年

c、秋里龍島「摂津名所圖会」一七九六年

（2）伊賀塚古墳・東灘区御影町西平野伊賀塚にあつたとされる古墳。摂津津にその名が見える。「神戸地方古墳地名表」（神戸地方古墳調査保存準備会他編、一九五六年）によると六基の方墳と記載されている。

（3）奥村探古「摂津國武庫郡おとめ塚」「考古学会雑誌」一八九七年

（4）吉井良秀「摂津國武庫郡の姫女塚」「考古学雑誌」三一九、考古学会一九一三年

（5）福原潜次郎「摂津御田村の東乙女塚」「考古界」一〇一七、考古学会一九二〇年

（7）喜田貞吉「上代の武庫地方」「摂津縣土史論」日本歴史地理学会一九一八年（後に「神戸市史」）

別録一 に再録)

（8）梅原末治「近畿の遺物と遺蹟（3）」「歴史地理」二六一、日本歴史地理学会一九一五年

（9）梅原末治「摂津武庫郡に於ける」、「三の古式墳墓（1）」「考古学雑誌」一二一、考古学会一年

（10）梅原末治「堺下に於ける古式古墳の分布」「兵

前学雑誌」六一六、史前学会一九三四年

（12）松下風信「兵庫県岡本梅林道跡に就いて」「史

庫県史跡名勝天然記念物調査報告書」一 兵庫県

一九二五年

（11）吉井良秀「摂津國武庫郡岡本村野小石棺に就いて」「考古学雑誌」三一、考古学会一九一三年

新聞にみる 史料館

去る四月三十日から五月二十九日まで行なわれた特別展「近代の着物に見る生活史」は好評のうちに無事終了しました。ご協力いただいた関係者各位に感謝申し上げます。

1988.8.4
神戸新聞より

地域を身近に異色の「ミニ博物館」

新文化の発展の歴史を示す「神戸深江生活文化史料館」

（写真）

「生涯學習」を実践 20代の社会人を中心巡回

（写真）



近世の宿駅争論からみる

史料館主任研究員

望月浩

舟坂間道

一年に一回、十月十日に史料館友の会主催の行事として、「魚屋道を歩く会」が行なわれる。この道が近世に「湯山間道」と呼ばれ、生瀬・小浜などの宿駅と論争をくり返してきたことは、田辺貞人氏が「魚屋道の往来—近世東六甲の山越え交通史」(歴史と神話)N.108、昭和五十六年十月一日刊に所収。後に昭和五十七年十月十日、深江財産区管理会より抜刷・復刊される。詳しく述べてある。

筆者も昨年十月十日発行の「生活文化史」史料館だより第10号「」で、前述の「魚屋道の往来」を踏襲し、「本庄村史資料編第二巻」に収録している荷着場開発についての史料を用いながら、近世における魚屋道をめぐる人々の様子を小文にしてみた。

だが、六甲山を南北に横断する抜け荷の道——六甲山間道——は魚屋道だけではなく、他にも諸物資を行っていた道がいく筋かあった。本文では舟坂間道と呼ばれる道について書き進めていきたいと思う。

徳川氏が江戸に幕府を開き、全国を支配するようになると交通制度の確立が政治・軍事上の支配費徹のためにも必要不可欠となつた。

幕府は江戸を中心とした五街道の整備に着手し、元禄時代の頃には本格的な近世宿駅制度を確立していったとされる。正徳元年(一七二二)には、定め

られた宿駅での荷物の継ぎ立てが義務づけられるようになつた。よって定められた宿駅を通らない荷物の通行は違法とされた。このため諸物資の往来が活発になつてくる慶安年間頃からは、この継ぎ立て権利をめぐつて争論が目立つようになつてくる。

本文でとりあげる舟坂間道も、生瀬等の宿駅からしばしば摘搾され、抜け荷の道であると訴えられてきた道であるが、この道はいく筋がある六甲山間道の中でもっとも東寄りを通つていて道である。有馬から船坂(西宮市山口町)を通り、船坂峠を越えて鷹林寺を経て西宮の懶岩神社へ通じていた。

四

本文でとりあげる舟坂間道も、生瀬等の宿駅からしばしば摘搾され、抜け荷の道であると訴えられてきた道であるが、この道はいく筋がある六甲山間道の中でもっとも東寄りを通つていて道である。有馬から船坂(西宮市山口町)を通り、船坂峠を越えて鷹林寺を経て西宮の懶岩神社へ通じていた。

二

文政元年(一八一八)に舟坂村が道筋七、八丁にわたつて道幅を二間に切り広げた。これに対し生瀬駅が訴訟をおこした。訴訟の内容は次のとおりで、外播州辺通り来候道筋二御坐候、然處右往來之旅人駕歩行荷等井荷物牛馬等二て御用之手透ニ相勤、是迄駅所相続仕来候処、此度舟坂村ニ新規ニ西ノ宮へ山ヲ崩し、往来ヲ崩、右處々之荷物、旅人等ヲ引請、西ノ宮へ通行いたさせ度存念に御坐候」

訴訟の結果、和議が成立したが、

「当村山道造立候儀此度西宮領境迄造り立不申

行仕候已後山道造り度候節ハ領境迄は造り立不申

境目より壱丁^半ニ二て造り止メ申候約定ニ御座候尤本文ニ生瀬より差障不申と有之候得共道造り之節立会之上道造り可申候為添証依て如件すなわち、舟坂村領分と西宮町領分との境界点と他ヶ所に木戸を設け、村人だけの通路として、その他の往来を停止する。領分境の地点より一町手前で道作りをすることなどが条件となつた。

しかし、この訴訟が出来ている間も、武庫郡上ヶ原新田の百姓が牛をひいて間道を通過したり、播州神郡牛尾村の百姓が大坂へ出るために通過したことがあつた。このことから遠方の者も利用しているようである。だが、舟坂村と西宮本町の平松屋喜兵衛が結んで、人や荷物を通していたことが露覗した。その後、先の和議が成立した三年後の文政四年(一八二二)に舟坂村が間道を普請し、この道は大道だと近鄰の在郷に伝え認めたりした。そのためにまたもや生瀬の宿駅より訴訟が出された。

その後、先の和議が成立した三年後の文政四年(一八二二)に舟坂村が間道を普請し、この道は大道だと近鄰の在郷に伝え認めたりした。そのためにまたもや生瀬の宿駅より訴訟が出された。

五

また、天保十年(一八三九)には、舟坂村が先の約定(文政元年)を破り、字清水谷より約二〇町の距離を二間幅の道路に切り広げた。このことがまた距離を二間幅の道路に切り広げた。このことがまた争論をひきおこしたようである。

文政元年の約定の後も、たびたび間道普請を行なつたので、生瀬の宿駅も神経をとがらせてきたようである。その例が次にあげる万延元年の事件である。万延元年(一八六〇)八月二六日付の生瀬役人から下山口村(西宮市山口町)にあつた「船坂村間道荷物運送一件引合書」で、

り六甲山打越之関道之荷物致運送候此義其儘ニ差置候ハ、駅々御用座立之相妨ケと相成候」と訴え、下山口村御役人に、佐兵衛がなぜ関道通行をしたのか、取調べをしてほしいと頼んでいる。この訴訟に対しても佐兵衛は次のような証文を提出している。

「私娘越木岩村へ縁付為致候ニ付、当五月三日吉日

にて右荷物船坂村迄罷出候處右同村にて聞及候處

此比雨降続候て川越難出来候様申候ニ付何心な

く山越二関道打越へ候事ニ御申候……」

と嫁入り道具を運んだと証明し、また、舟坂から生

れ入り道具を運んだと証明し、また、舟坂から生

瀬への有馬道が雨のため交通困難であったと言つてゐる。確かに生瀬一舟坂間の四キロほどの道は、大田川の河原や渓谷を通るので、非常に難波をさわめた。前述の青野道を通過する理由に、「然共生瀬村より船坂村迄志里余之所川之瀬伝往来仕候、大雨之折節ハ不及申、一時之洪水にも通留り申候……」としてある。

生瀬から有馬へ至る道筋の前半を大多田川四十八瀬といつてゐるが、「滑稽有馬紀行」に、

「水ますときはとびこへこの上を水ながれ行く、其

水の中をとひ越かよふなり、全体大石多く小石も

まじる甚だのなん所なり、往来の道筋たしかなら

ず、おりくの大水にてながれる故、その度に道

かはるかなり、此ゆへに往来のもの、人のかよふ

足のあとをしてしるへにして往来するゆへ、いたつて

わからがたし、かるがゆへにあんないなくてはし

れず云々」

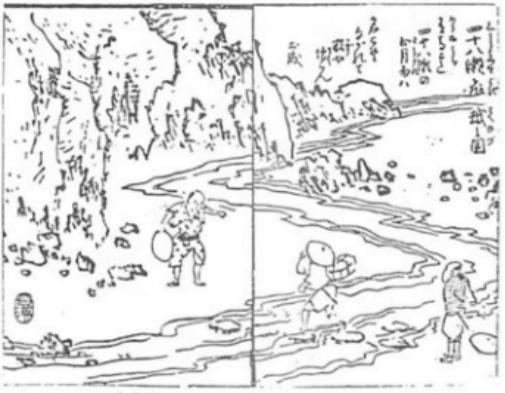
とあるから、実際生瀬へは交通困難であったのだろ

う。

六甲山間道に物資輸送の影響をもつとも受けたのは、生瀬であろう。西宮・兵庫へ行く荷物が主だつたからである。特にこの舟坂間道は、青野道によつて京・伊丹へ向かう荷物が頗りだつただけに、神經

をとがらせていた。

また、この舟坂間道は、魚星道と違い、在郷が特権的宿駅と対抗していいたと言えるであろう。しかししながら筆者は、結局西宮へ行く荷物であるし、西宮の平松屋喜兵衛がからんでいるところを見



大多田川四十八瀬（滑稽有馬紀行より）

六

- ① 「西宮市史」第五卷八二七頁「船坂村新規道造りにつき故障申立て」
- ② 「山口村誌」三九三頁「為取替一札」添証文之事」
- ③ 「西宮市史」第一卷六三〇頁
- ④ 「生瀬の歴史」九〇頁
- ⑤ 「西宮市史」第二卷六三〇頁
- ⑥ 「西宮市史」第五卷八二八頁
- ⑦ 同右「嫁入荷物間道輸送証文」
- ⑧ 「西宮市史」第五卷七九四頁「生瀬村馬借絵図面断報」

（主な参考文献）

- 「西宮市史」第二卷／魚澄豊五郎／西宮市役所
- 「西宮市史」第五卷／武藤誠・有坂隆道／西宮市役所
- 「近世の宿駅争論」〔近代〕第七号／八木哲浩

- 「滑稽有馬紀行」／大根士成／文暉堂
- 「生瀬の歴史」／松岡孝彰
- 「街道と水運」岩波講座日本歴史10近世2／渡辺信夫／岩波書店

ると、西宮駅が兵庫・湯山のように黙認をしていたのではないかと考えられる。確固たる史料がないのではつきりとは言えないが、また、下山口村佐兵衛の場合のように、生瀬一舟坂間の交通事情の悪い時のバイパス代わりであったのだろう。

研修会への館員派遣

S63. 5. 27

63年度 兵庫県博物館協会総会
総会 決算報告・役員改選・事業計画
見学 特別展「ほとけ、かみ、ひと
—三田の文化財」
(派遣館員 研究員 道谷卓)

資料寄贈者ご芳名(九)

昭和63年4月以降
敬称略

〈資料〉

前田常雄・輪章／八木保・罹災者票2点／
土居芳樹・ひな人形・川野勝一・いもん
ぶくろ／野田正蔵・長持・矢島文子・も
んべ上下／大國正美・衣料切符他32点
<書籍>

薄井晃三・魚吹八幡神社秋祭絵巻
尼崎市教育委員会・尼崎の漁業、
尼崎の寺町

近藤雅樹・仕事着
尼崎市立地域研究史料館・地域史研究
第17巻第3号

芦屋市教育委員会・新修芦屋市史本編、
資料編2

辰馬考古資料館・山田博雄収集資料目録
他18冊

有野更生農業協同組合・有野町誌

伊丹市立博物館・地域研究いたみ第17号
兵庫紙幣史編纂室・兵庫紙幣紙の研究
第6~8号

芦の芽グループ・蘆編 50~54号

兵庫県教育委員会・深江北町道跡報告書

◇編者から◇

初めて史料館だよりの編集を担当しました。前号までの担当者の苦労が今さらながらよくわかりました。私の味を少し出してみたつもりです。また本誌へのご感想・ご意見をお待ちしております。

(H・M)

史料館日誌抄

史料館事務局主事 川口きつき

S63年

5月7日 福池小学校 6年生(見学者 115名)
この日 入館者2万人目 仲山さん一家
5月8日 友の会 第49回例会(参加者 35名)
神戸史学会第25回例会
講演「近代の着物にみる生活史」伊東玲子氏
「明治・大正の京友禅」志村光廣氏
6月5日 友の会 第50回例会(参加者 50名)
見学会「東灘の歴史を歩く」
講師 望月浩氏 道谷卓氏
7月3日 神戸史学会 第26回例会(参加者16名)
講演「近世江戸送り酒の偽樽と商標権」石川道子氏
「魏志後人伝から都台合団を見つける手法」小合彬生氏
7月10日 友の会 第51回例会(参加者 25名)
スライドとお話「中国邊境ところどころ」永田伸雄氏
〃 「留学生から見たニュージーランド7ヶ月」山本文雄氏
7月31日 辰馬考古資料館見学会(見学者 55名)
9月4日 友の会 第52回例会(参加者 21名)
神戸史学会 第27回例会
講演「中世神戸の売券状について」木南弘氏
「主筆・村上定と神戸日報」成田謙吉氏
9月18日 金岡町文化協会(見学者 45名)
9月23日 友の会 第53回例会(参加者 55名)
東灘歴史散歩 講師 望月浩氏 道谷卓氏

史料館の入館者2万人突破!



記念品を手に喜びの仲山さん一家

去る五月七日に、開館以来二万人目の入館者が来られました。東灘区北青木の仲山さんご一家で、「雨の中、来たかの新聞でよくこういう記事を見ますが、まさか自分がたるとは思いませんでした。」と史料館から手に喜びの声をあげています。

この記念品が手に喜びの声をあげています。

協力団体	神戸市教育委員会	神戸市観光課	芦屋市教育委員会	東灘区役所	国立神戸・航船大学	神戸史学会	明石市立森林植物園	明石市立天文科学館	芦の芽グループ	神戸共同印刷	日本橋博物館	明影高校地盤部	神戸市立森林植物園	本庄五校園	大丸百貨店	サンチャビ	明石市立森林植物園	明石市立天文科学館	大丸百貨店	サンチャビ	明石市立森林植物園	明石市立天文科学館	大丸百貨店	サンチャビ	明石市立森林植物園	明石市立天文科学館	大丸百貨店	サンチャビ	
事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員	事務局員			
の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員	の会員		
多納	多田	佐原	大川	磯辺	門前	柏原	道谷	田部美知雄	小嶋	志井	喜康	正民	文雄	卓雄	松尾	志井	小嶋	大國	正美	福島	昭夫	正夫	太田	坂上	坂上	太田	坂上	太田	
春	春康	治	浩	清	信三	保	正	民	西	大	大	大	鶴	祐作	志井	志井	志井	正美	正美	正美	正美	正美	正美	正美	正美	正美	正美	正美	
藤	藤	久	光	かり	か	久	恵	史	田	吉	寺	中	小	藤	月	伊東	望	太田	坂上	坂上	坂上	坂上	坂上	坂上	坂上	坂上	坂上	坂上	坂上
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	